「リベラル・アーツ」とはなにか
――大学における「教養」――

基盤教育センター
ドイツ語学科
寺門　伸

「国際教育研究施設」の「医学基盤教育センター」のルーツは「獨協医科大学教養医学科」である。教養医学科に所属する教員・研究者は共済組織を運営していたが、それはLA会という名称であった。これはLiberal Artsの略称である。

Liberal Artsというのはもちろん英語であるが、大学の教養課程のことである。「自由な芸術」がなぜ「教養」という意味をもつのであろうと不思議に感じる人が多いと思われるが、今回はLiberal Artsという言葉の由来を探り、大学における教養の役割について考えてみたい。

「アート」とは我々の感覚からすると、なによりも先ず「芸術」であり、具体的には絵画・彫刻・建築・音楽・書道・演劇・詩・小説といった、「美」を創造する人間の営みを表現する言葉である。

今手元にある英和辞典でartを引いて、その語義を確かめてみよう。これは大体どの辞書でもほとんど変わらない。

1. 芸術；美術
2. 技術、技巧、わざ、技芸、方法
3. a) 基礎科目、[大学の] 教科、教養科目　b) 人文科目

これを見ると英語のartは「芸術」と同時に、「教養科目」、特に「人文科目」を指す言葉であるらしいことが分かる。

語源を調べてみると、artのar- はput things together, join「(部分を)組み立てる」「(部分を) 結合する」という意味で、そのためには一定の「コツ」が必要となることから、「わざ」や「技術」という意味に用いられるようになったらしい。ここから美を創造する特定の技、つまり「芸術」「美術」を表すように意味が変遷したということは容易に想像がつく。

artに相当するドイツ語はKunstであるが、こちらは話法の助動詞können「...することができる」(英語のcanと同語源) の名詞形で、元来「できること」「作り出すこと」「技」「技能」「人工」を意味し、現在ではやはりドイツ語で普通に「芸術」「美術」を意味する単語となっている。(というよりもおそらく、ゲルマン語系のKunstという名詞がフランス語のart [アール] と同一化されて、両者は意味を共有するようになったものと推測される)

ここで我々日本人が違和感を感じるのは、art がどうして「学問」「知識」という意味に使われるのだろうか、ということである。なぜならラテン語には ars[アルス](= art)以外に scientia[スキエンティア]「知識」(= science)という単語があるからである。こちらを用いて「教養」のことを例えば Scientiae Liberales［スキエンティアエ・リーベラーレース］(= Liberal Sciences)とでも名付けたのであれば、おそらく私たちにもそれほど違和感はないはずである（”liberal”については後ほど述べる)。

これはおそらく古代・中世においては、「実践を離れた学問・知識」というものは考えることができなかったせいであろう。古代エジプトやギリシャでは天文学や幾何学が盛んであったが、それは抽象的な知識や認識そのものの獲得を目指すことによってではなく、建物の建造や船の航海といった具体的・日常的な必要に迫られて発達したのである。

例えば幾何学は古代エジプトにおいて、ナイル川の定期的氾濫に備えるための土地測量を起源としているというのが定説である。天文学は暦の作成や航海の安全などを具体的目標として発達した。暦の確立のメリットはいろいろ考えられるが、農作物の安定的確保ということが主要な動機の一つになっているであろう。数学（代数学）は数を数えるという行為が基本となっていて、商取引の必要から次第に体系化していったに違いない。

知識を知識として追求するようになるのがヨーロッパの近代であって、そのことによって科学は飛躍的に発展することになるのであるが、これが人類におけるきわめて特殊なケースであることは世界史を眺めれば明らかであろう。

こういう背景を考えてみれば、古代ローマ人が学問を総称する名詞として、scientia「知識」ではなく、ars「技術」を選択したことはなんら異とするに足らないのである。

ところで、Liberal Arts はラテン語の artes liberales［アルテース・リーベラーレース］を英語にしたものである。これは「自由人の技術＝知識」という意味であり、古代ローマ市民が当然身につけるべき基本的技術＝知識のことをこう呼んだ。これに対し、機械的・応用的な技術、つまり手の技術は、artes mechanicae［アルテース・メーカニカエ］という。

西ローマ帝国が滅亡する５世紀後半から 6 世紀にかけて、この artes liberales は自由人の教養必須科目として体系化されたが、それが septem artes liberales［セプテム・アルテース・リーベラーレース］「自由七科」である。(英語では the seven liberal arts、ドイツ語では die sieben freien Künste という)

この自由七科はキリスト教における教育理念としても受け入れられ、やがて 11 世紀のボローニャ大学の設立を皮切りとして、12・13 世紀にヨーロッパ各地で大学が成立するようになると、大学のカリキュラムの基本として確

立するに至る。
　大学は神学部・法学部・医学部が中心であったが、学生はこれら専門学部で学ぶにあたって先ず最初に、すべての技芸＝知識の基礎であり、あらゆる専門的技芸＝知識の前提・土台となる自由七科を哲学部において習得することが求められた。これが大学における教養課程のルーツである。
　ところで当時「哲学」という学科がもっていた意味合いは、現在とは大いに異なる。哲学は英語で philosophy、ドイツ語で Philosophie［フィロゾフィー］、ラテン語では philosophia［ピロソピア］というが、これは周知のように「知を愛する」という意味である。古典古代・ヨーロッパ中世にあっては、philosophia はまさしく知を愛するということそのものを指しており、つまりは「知識・学問」と同義なのである。
　現代風に分かりやすく言えば、科学的精神、学問する心、探求する心そのものが「ピロソピア」と呼ばれたのである。現代でも「哲学する心」などという用法にその名残が見られる。これは物事を根本的に考えるというのと同義である。
　下に自由七科のリストを挙げてあるが、これを見ると、ここには哲学は入っていない。なぜなら自由七科すべてが哲学だからである。ところで哲学はその根本的語義からいえば、すべての学問を包括する概念であるが、artes mechanicae と対立させると、artes liberales のみを指すことになる。上記の「法学部」や「医学部」に対して、「哲学部」があるというときにはこの意味である。
　そこからさらに現代においては、時間とは何か、空間とはなにか、自我とは何かといった、人間存在の根本問題を問う学問のみが「哲学」と呼ばれるようになるのである。
　ここでリベラル・アーツの具体的内容である自由七科について詳しく見てみよう。すでに述べたように、リベラル・アーツとは一人前のローマ市民が習得すべき基礎的学問という意味であり、それを具体的に列挙したものが「自由七科」である。自由七科は三学と四科に分かれる。

◎自由七科（＝哲学、すべてを統括する知恵＝論理的思考）
　三学（言語系→人間学）：　文法・修辞学・論理学
　四科（数学系→自然学）：　算術・幾何・天文・音楽

　三学は言語系であり、四科は数学系であるから、一応前者を人文科学部門、後者を自然科学部門と考えてよかろう。ギリシャ人やローマ人は真理を知るための手段として言語の働きをきわめて重視していた。
　三学のうちの文法と論理学とはロゴスに関する学問であり、人間の内なる精神作用としてのロゴスの働きを見極めるという意味をもっている。そして

自然界にはロゴス（＝法則、規則、論理的関係）が内在していると彼らは信じたから、カントが純粋理性批判で行った、理性の働きそのものに関する学問といっていい（ただし「理性の限界」という観念は非常に希薄であった）。

修辞学はこれらとはちょっと性質が異なっており、その名（rhetorica［レートリカ］）の通り、こちらは人を説得するためのテクニックという意味合いが強い。政治との関連で重要視されたものであろう。弁論術を重んじるのはギリシャ以来の伝統である。

次に四科であるが、算術・幾何・天文がここに入っていることにそれほど違和感はないものと思われるが、我々の感覚で不思議なのは「音楽」であろう。現代では様々ある芸術のその一分野にすぎない音楽がどうして自由七科の一つに入れられているのであろうか。

ここで音楽が含まれている四科の性質をよく考えてみよう。四科は数学系であると既に言った。ここでいう音楽とはハーモニーであり、音の調和である。音の調和は和声ともいうが、和声学は数学的秩序に基づいている。そして古代ではこの音の調和がそのまま自然界の調和を象徴するものと考えられたのである。したがって音の秩序を探求することが、そのまま自然界に存在する秩序を知ることに繋がる。

古代ギリシャ人は数を始めとする抽象的なものに対する愛着が強く、プラトンのイデア論に典型的に現れているように、抽象的なものこそ究極的実在であると信じる傾向があったから、音楽は抽象的なものであるゆえに特に重んじられ、音の調和に内在する数学的秩序がそのまま自然や宇宙の秩序を知るための鍵であると考えられたのであろう。

戦後の大学の教養課程はこのリベラル・アーツという教育理念が基礎となっている。西洋においてリベラル・アーツとは、自立的思考ができる自由な人間（近代ヨーロッパにおいてはこれはとりもなおさずエリートということを意味する）として身につけなくてはいけない基礎的・根本的・根源的知識のことを意味するが、これを日本語の「教養」という言葉に当てはめると、そこには大きな落差が生じてくる。

日本語の「教養」とはそもそも「教え養うこと」という意味であるが、大辞林で引くと、つぎのように説明されている。

1. 学問、幅広い知識、精神の修養などを通して得られる創造的活力や心の豊かさ、物事に対する理解力。また、その手段としての学問・芸術・宗教などの精神活動。
2. 社会生活を営む上で必要な文化に関する広い知識。「高い―のある人」「―が深い」「―を積む」「一般―」

1.は大学における教養、つまりリベラル・アーツとしての教養と考えてよ

いと思われるが、一般には教養という言葉は、「教養がある人」や「教養をひけらかす」という言葉からも分かるように、単に「幅広い知識をもっている」とか、「たくさん本を読んでいる」という意味で用いられている。つまり教養はあるにこしたことはないが、なくても生活していく上にはそれほど困らない、いはば「文化的修飾物」として考えられている。

そしてこの教養の捉え方が、日本の大学における教養課程の位置づけにそのまま繋がっている。大衆化した戦後の日本の大学においてエリート教育は建前上否定されているが、そのような雰囲気の中で、もともと実学的傾向を強く持ち、「教養」を文化的お飾りと考える日本人が、大学とはすなわち専門教育の場であると心得て、大学における教養教育を軽視するに至ったことは驚くにはあたらないであろう。

そもそも大学という組織はヨーロッパの文化的伝統の中から生まれた制度である。日本の大学も当然その理念を受け継いでいる。このことは学校教育法第 52 条による大学の定義からも明らかである。

そこには「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的としている」とある。「広く知識を授ける」が教養教育、「深く専門の学芸を教授研究」が専門教育および研究を指していることはいうまでもない。つまり大学における教育は教養教育と専門教育の二本の柱から成り立つといっているのである。逆にいえば、教養教育を行わない教育機関は「大学」ではありえない。

ところが驚いたことに、高等教育の現場にも「大学」と「専門学校」の区別がつかない教員・研究者がいるのである。もちろん日本の大学が、欧米の大学の理念をそのままそっくり受け入れる必要はないのであるが、まず大学と専門学校の区別をはっきりつけた上で、さて「日本の大学」とは何かをじっくり検討し直してみることが、現在の日本の初等・中等・高等教育をめぐる混乱を克服する一つの道となるであろう。